

青森市では、教育振興基本計画の概要の中で基本方向「教育環境の整備・強化」施行4“安全・安心で質の高い教育環境を整備します。”としている。本レポートでは青森市立女鹿沢（めがさわ）小学校勤務時に、学校用務員（本市では技能員という）として、子ども達が安全・安心のみならず学校生活をより楽しく過ごせるために取り組んだことを提言する。

割れ窓理論を学校で実践 —— 彩りを添えて笑顔メガ盛り ——

青森県本部／青森市役所職員労働組合・浪岡中学校 一戸 進

1. はじめに

勤務先の学校名が女鹿沢（めがさわ）小学校というのもあり、校長が“めが”と単位の”メガ“を掛けて掲げたスローガン”笑顔メガ盛り“。子どもたちが笑顔になることで保護者、先生、そして地域の皆さんも笑顔にしていくというのが目標である。

学校としての主たる取組みは子どもたちに夢・志を持たせ元気に明るく過ごさせていくことであるが、子どもたちを笑顔にさせるため学校用務員としてできることを実践した。

① なぜ環境を整備するのか？

まず安全と安心は別物である。安全の確保とはざっくり言うと命の危険、怪我をする危険などがないように配慮することと思う。

では安心とは？

例えばボロボロな廃墟を見て“落ち着く”、“安心できる”という気持ちになるだろうか。大半の人は不気味に思うに違いない。ましてや子どもたちは尚のことであると思う。廃墟とは極端な物言いだ、草刈りがされていない校庭や公園を見ると、人のいる気配を感じず薄気味悪く怖さすら覚えるものである。人の手がかけられていない場所というのはイコール“危険”とを感じるものだ。そんな環境では安心できないのである。

また、ゴミが落ちていたり汚れていたり、掲示物の剥がれや表示板の壊れなどがあると、上記同様に安心感は得られないだけでなく、さらにゴミが落ちているのが増え、汚れもひどくなっていくこともあり得るし、きれいな環境であれば汚してはいけないと思うのが人間の心理ではないだろうか。まさに「割れ窓理論」に通ずるものがあると考えている。

② 「割れ窓（ブローケン・ウィンドウ）理論」とは？

アメリカの犯罪学者ジョージ・ケリング博士により提唱されたもので、1枚の割れた窓ガラスを放置すると、割られる窓ガラスが増え、その建物全体が荒廃し、いずれ街全体が荒れてしまうという理論。

建物の窓が壊れているのを放置すると、誰も注意を払っていないという象徴になり、やがて他の窓もまもなくすべて壊される状況を誘発するというもの。つまり、軽い違反や乱れを見逃していると、住民のモラルが低下し、環境の悪化や犯罪の多発に繋がるという考え方である。



青森市教育振興基本計画の概要

かつて、アメリカのニューヨーク市長が「割れ窓理論」を実践し、市内の落書きや割られた窓の修理など、軽微な犯罪取締りを強化したことで犯罪の発生が大幅に減少したと言われている。（ネット記事引用）

2. 「割れ窓理論」を踏まえて

環境が悪いと心は荒み、子どもたちにも悪影響であるのは間違いないだろう。逆を言えば学校内は掃除が行き届き、蛍光灯の切れもなく明るく、カーテンなどもきれいな方がより安心できるし、落書きもなく、ゴミも落ちていることもなく、校庭は草刈りがきちんとされて管理が行き届いたきれいな状態であれば子どもたちも安心して過ごせるに違いない。これは青森市教育委員会の云う安全・安心で質の高い教育環境づくりと直結しており、学校用務員の役割は極めて重要であるということと思う。



草がボーボーな公園（ネット画像引用）



割れ窓理論を実践したニューヨーク市
（ネット画像引用）

3. 質の高い教育環境を求めて

質の高い教育環境とはなんぞや。捉え方によっては広域になると思うが、文科省ではICTやデジタル教材の活用、地域の人材との連携を通じて、学びを充実させる方針を打ち出している。つまりは基本的な学びの部分。そして、施設指針では、採光や通風、防災・防犯に配慮し、安全で安心感のある環境が求められており、またICTなどを活用しやすい設備が整っていることなども挙げられる。つまりは物理的環境の部分。（文科省HP参照）また子どもの多様性への配慮なども質の高い教育環境を追求する上では重要である。

さて、私たち学校用務員として何ができるか？となると、物理的環境の部分であるのは言うまでもない。

4. 学校を彩る

青森市では地域の特性を活かした学習としてスキー学習がある。学校によるがスキー学習用の山が校庭内に存在する。もちろんスキー山にも雑草が生えてくるため定期的に草刈りをするのだが、その斜面に文字を入れて彩りを添える取組みを始めてみた。

① はじめたきっかけ

校長の“学校に彩りを添えたい”という提案に対し、学校用務員としてできることはないかと考えたのがきっかけであった。

以前からスキー山の斜面に文字が入ったら、子どもたち（学校の先生や保護者も）は“驚くだろうな”、“楽しんでくれるかな”と思っており、いつかやってみたいと思っていたので、“これはチャンス！”と校長に提案し実現させた。

② 第1弾 創立60周年記念

校長からの彩り提案があった年は女鹿沢小学校の創立60周年であり、それを記念した運動会に合わせてスキー山に“60th”の文字を入れることにした。

子どもたちの下校後（確か午前授業の日を狙って）に文字を入れたので、翌日登校し気づいた子どもたちは“おお、文字入っちゃう（津軽弁：入ってるの意）！”、“すげえ！！誰やった？”などの驚きと興奮の声があがっていた。その様子を見ていた私も嬉しさと興奮、達成感、充実感に溢れたのを覚えている。

運動会当日、保護者の方たちも写真を撮影するなど喜んでいただけたようで、常に見える“60th”の文字に60周年を記念して開催した運動会自体にも彩りを添えることができた。



スキー山の“60th”の文字



文字で遊ぶ子どもたちの様子

③ 私の喜ばせたいスイッチに火がつく

女鹿沢小学校は今から20年ほど前に校舎が建て替えられ、その時に校庭もきれいに整備され青森市でも珍しい全面が芝生で敷かれたそれはそれは素敵な校庭であったようだ。しかしながら年月が流れ、私が赴任した時には雑草が全面を占めるようになってしまっていた。となると、草刈りをする範囲が広く昨今の温暖化の影響なのか、青森市も6月下旬から9月に入るまで35℃を超える日も多く暑い中の草刈り作業はなかなか大変ではある。

が、ここは視点を変えて、この珍しい全面芝生（雑草など）の校庭を活かさない手はない。



スマイルマーク

④ 世にも珍しい雑草迷路の出現！？

せっかくなので何かできないかと考え、考えついたのが、授業や避難場所（地震や火事のような有事の際の）で使用する場所は当然草刈りをしておくとして、それらに支障がないような校庭の一角の場所を雑草などを敢えて残して迷路を作ってみてはどうか。

草刈機（オートモアー）で迷路コースを作ると、私の想像を超える盛況ぶりであった。ただし、6月上旬と暑くなり始める時期であったのもあり熱中症にならないかという心配もあり、子どもたちが遊ぶ前提のものは作るタイミングを考える必要があるとも思った。



雑草迷路の出現



迷路を楽しむ子どもたちの様子

⑤ 彩ることで季節感を感じてほしい

スキー山の文字入れは運動会の開催時期に合わせて、“GO!!”、“MEGA”なども入れた。また秋には何か気持ちが前向きになれるように“HAPPY”、文字ではなくスマイルマークやハロウィン時期にはカボチャのマークなども。とスキー山の文字入れは時期によって変えて子どもたちに楽しんでもらえたはずである。その証拠という訳ではないが図工で描いた校庭の絵には、その時の文字やマークも描かれていた。

さらに年始には、雪を利用して雪像作りにも取り組んでみた。はじめは寅の顔、次年は卯年でうさぎを作ったりもした。が、3年目。青森市では珍しく雪が積もらず辰年を作れずにいたのだが...

子どもたちや保護者の方から“今年は干支の雪像ないんですか？”と言われ、注目してくれていたことに気付かされる。さて、どうしたものかと考えた結果、雪がだめなら校内に作って彩ろうと生徒玄関の天井に段ボールや色紙、風船を使って巨大な龍を出現させた。これにも子どもたちはとても喜んでくれて、先生方も写真を撮ったり楽しんでくれた。また体験入学で来校した保育園の園児たちからも“うわあ、龍だあ、すごい”と言った声が聞こえてきて、学校って楽しいところなんだと感じてくれたらいいなと思ったりもした。風船はどうしても空気が抜けて萎んでしまうため、何度か新しい風船につけ替えて卒業式、入学式までは維持して式を明るく楽しいものになったのではないかなと思う。

また、ハロウィンの時期に英語の指導をされている外部の先生から大きなカボチャをいただいたので、中や顔をくり抜き校内や玄関に飾ったりもした。その翌年は、学校の畑で栽培から始めたのだが、子どもたちも大きくなっていくカボチャに興味津々であり、なかなか見ることのできない大きなカボチャの成長を間近で見せることができ、良い学習になったのではないかなと思っている。

こんな取り組みをしているうちに、校長はじめ他の先生方の協力を得られるようになり、廊下を歩くように促す掲示方法を工夫（走りづらくなるような絵を生徒に描いてもらってパイロンに貼って廊下中央にたくさん立てる）してみたり、クリスマス時期には以前自宅で使っていたというイルミネーションを生徒玄関や廊下に巡らせてみたりもした。（大きなクリスマスツリーは赴任当初から学校にあった。当然、生徒玄関に飾る）



雪像（寅）



雪像（卯）



生徒玄関頭上に現れた風船の辰



ハロウィンでのオバケカボチャ



生徒玄関のクリスマスツリーと
イルミネーション

⑥ 階段の手すりにも彩りを

ある時、低学年の生徒が階段手すりをすべって遊んでいるうちに1.5階ほどのところから1階床に落下するという事故が起きた。骨折をするという重症は負うも命に別状がなかったのが不幸中の幸いであった。即、手すりの安全面を見直し、まずは子どもたちへ遊ばないように指導すること、そして、物理的に遊べないようにすることの2つ対応することになった。後者は教育委員会施設担当者にも連絡をし、早急な対応をお願いしたが、時間を要する様子であったため現場で対応することになった。ドアノブを取り付けてみてはという案やすべらないようにゴム製のものを貼り付けるといった案も出された。

が、いずれも万が一、逆にドアノブにぶら下がりはしないか、ゴム製ですべらないところをすべったらブレーキがかかり、勢いがあると落下してしまうのではないかという話にもなり却下となる。子どもたちは良くも悪くも予測不能な時がある。

そこで、提案したのがイラスト付きのパネル（すぐ対応できる段ボールと画用紙製）を等間隔に設置する方法である。これは物理的にもすべりづらくなるのと、イラストがあることで手すりではなくイラストに意識がいて遊ばなくなるのではないかという心理的なアプローチも兼ねていた。

片面にはお花を、もう片面にはクイズ形式のしりとりにしったりと事務職員のアイディアとイラスト製作にも助けられた。

効果はいかに。その後約1年間はこの状態が続き（本音を言えば教育委員会施設担当者の対応の遅さにも問題があると思ったりもした）、その間に事故もなく、またすべて遊んでいるという報告はなく一定の効果があったのではないかと。

但し、クイズ形式のしりとりには飽きがあったのではないかとということと、子どもたちが触る（叩く？）ため破れなどが生じて何度も補修せねばならなかったのは課題となった。



階段手すりに取り付けたパネル

5. 彩りで“笑顔メガ盛り”

これらの取組みを通して、子どもたちの笑顔の数は増えたと確信している。これは女鹿沢小学校の目標、そしてスローガンである“笑顔メガ盛り”に少しでも貢献できたのではないかとと思うところであるし、青森市教育委員会の教育振興基本計画「安全・安心で質の高い教育環境を整備します」に一役買っているのではとも思う。また、授業（図工）で校外の絵を描き各教室付近の廊下に展示しているが、その絵を見た時にスキー山が入っているものには、その時々草の文字も描かれており、この取組みが子どもたちの心にしっかりと刻まれたのだと実感した瞬間であった。大人になって、小学校での良い思い出として残っていてくれたら嬉しく思う。

6. さいごに

多様化が進む現代、教育委員会も現場の先生方も懸命に対応しているとは云え、様々な理由で学校に来れないという生徒も多いと聞く。そんな中、青森市の小学校（42校）で唯一不登校児童がいないのが女鹿沢小学校である。それにはチーム女鹿沢（女鹿沢に関わるスタッフ全員）一丸となり、より良い教育環境を作り上げてきた賜物であると思う。そして、“勉強はきらい”、“友だちとケンカをしてしまって気まづい”、“先生がこわい”などのネガティブな気持ちもある中で、“なんだか学校が楽しい！”と思える要因のひとつに学校を彩る取組みが反映されているとしたら嬉しい限りである。

また、上記の取組みができたのは働いている私の心と時間に余裕があるのと、子どもたちを喜ばせたいという想いがあったからである。心と身体が健やかで気持ちよく働いているのは青森市職員労働組合が働きやすくするために様々な取組みや当局側との交渉をしてくれているおかげであり、仕事をする上で大事なものは誰かのためにという想いや目的意識がしっかりとあることではないかと思う。私は良い環境で働きがいのある職場で働いていることに幸せを感じているところである。

世に云う働き方改革とは、賃金の向上や福利厚生の実施に目がいきがちだが、私の思う“より良い働き方”というのはそこに“働きがい”を感じれて、達成感や満足感を味わえていけるかどうかが重要なのではと考えている。その達成感等も自己満足で終わるのではなく、子どもたちのため、人のため、地域のため、世の中のためになってこそそのものでありたい。

未来ある子どもたちが夢・志をもって“笑顔メガ盛り”で過ごせていけるようこれからも尽力していきたいと思うところである。